

全国運転代行協会長 丹沢忠義さん (80)

バーテンダーの肖像



切り絵・小川信行

カクテルの名士を数々紹介してきたが、酒をたしなむ上で忘れてはならないルールがある。「飲んだら乗るな」。飲酒後は車のハンドルは握れない。広く定着しているが、それでも飲酒運転による悲惨な事故は絶えない。

運転代行補償の共済組合、シェイ・テイ共済協同組合(富山市)の理事長であり、全国運転代行協会の会長。「夜だけでなく、午後から頼める会社もある。冠婚葬祭でも飲んだら代行を使って」と話す。全国を飛び回り、飲酒運転根絶と業界の健全化を訴えている。

5月には宇都宮を訪れ、カクテルカーニバルの会場で「飲酒運転ゼロ」を呼びかけた。

全国駆け「飲酒運転ゼロ」

山梨県出身だが、運転代行発祥の地とされる富山で同組合を設立した。「黒部ダム建設で働く人たちが月に1日の休みに市街地で飲んだが、帰りに事故を起こすなど問題があった。飲食店が協力し、客を送ったのが運転代行の始まりのようだ」と話す。

長く、法規制がなかったが、平成14年施行の法律で認可制となった。これらの法整備も業界のリーダーとして、国に働きかけを続けてきた。

「全国に8900社、2万9千台ともいわれるが、ダンピングも横行し、保険加入や資金支払いが不安定な業者も。経費をかけてまじめにやっている会社が立ち行かなくなる状況もある」と指摘。4月、国から地方への権限移譲で、代行業の監督が都道府県に移された。「お客さまの命と車を預かっている。利用者の安心のためにも最低料金だけでも条例で決められないか」。検討を始めている自治体もあるという。